

## ICUの教育環境の時代的変遷 — 1983年度と1993年度の比較 —

岡林 秀樹  
大井 直子  
原 一雄

### はじめに

近年、大学設置基準の大綱化に伴い、大学の自己改革の基点として、大学の自己点検・自己評価が公式に要請されるようになってきた。本来、このような評価活動は大学の理念・目標に照して自発的に行なうべきものであり、最終的にはそれが大学の自律性の表れとして行政にフィードバックされることが望ましいのだが、ややもすると調査自身が自己目的となり、社会、他大学ないし文部省向けの大学白書あるいは自己評価報告書の出版のみに終わってしまう恐れがある。

大学の教育活動が十分機能しているのか否かを検討する方法の一つとしては、自己点検の他に他大学との比較が考えられる。近年、全国規模で行なわれたものとしてリクルート社による“在学生による「大学別満足度調査」”が挙げられ（リクルート、1992）、そこにおいては国際基督教大学（以下ICUと略称）は総合満足度が“第1位”という高い評価を受けた。しかし、その結果を鵜呑みにして本学の教育活動に問題なしとするのは早計だろう。

評価活動はあくまでも評価目標に沿って行なわれるべきものであることを考えると、教育理念・教育目標がそれぞれ異なる私立大学における評価活動は、単に他大学との比較のみで十分だとは思われない。むしろ、各々の大学がそれぞれ固有の教育目標に照して継続的に自らの教育活動の評価・診断していくことのほうが重要であると思われる。本学の様に、他の日本の大学と

その建学の精神を大きく異にする大学においては、なおさら継時的な自己評価が必要となってくると考えられる。

## 目 的

大学環境の研究は、Koffka の“ゲシュタルト心理学”(1935)、Lewin の“場の理論”(1936)、Murray の“欲求－圧力”理論(1938)などを基礎として 1950 年代の米国において生れた。例えば、Pace と Stern (1958) は、大学をとりまく文化を諸々の個人の欲求とそれに対応している環境の圧力との複合であると考え、College Characteristic Index (C C I) を創案した。この C C I は、30 個の環境の特質を測定する評定尺度から構成されており、各々の評定尺度は上記 Murray の“欲求－圧力”理論の概念から導かれた Activities Index (A I) に含まれる 30 の性格欲求評定尺度に相応するものとして考案された。つまり、Murray が個人の様々なパーソナリティを我々の欲求とそれに対する圧力との関係から捉えようとしたのと同じように、大学の性格もまたその環境圧力と、そこにおける学生の様々な要求との関連において調べる必要が在ると考えたのである。しかし、その後の研究から、C C I に含まれる多くの環境圧力評定尺度は、性格欲求評定尺度と相応するものではないこと、すなわち、有機体とみなされた環境はいろいろな面において、様々な性格を持つ個人が集って作りだす構成とは異なっていることが判明した (Pace, 1967)。

そこで Pace (1967) は、大学の環境を構成するいろいろな変数は、個人的性格の要因と考えられる心理的内容ではなく、そこで計画実行されている教育活動の内容によって定義されるべきものであると云う仮説を立て、この考えに基づいて C C I に因子分析による検討を加え、College & University Environment Scales (以下 C U E S と略称)を開発した。従って、C U E S は、大学間の知的、文化的、そして社会的雰囲気の相違を明確に示すものと考えられ、大学生活について設けた 5 領域、すなわち、“実用性”、“学究性”、

“共同性”、“礼儀性”、“意識性”の各々につきそれぞれ30項目、計150項目の質問項目から構成されたものである。各領域の構成内容は以下の通りである。

- A 実用性 (Practicality) --- 個人的地位や実利などが強調される程度。
- B 学究性 (Scholarship) --- 学問的意欲、知的関心などが強調される程度。
- C 共同性 (Community) --- 共同体としての意識や実体が存在する程度。
- D 礼儀性 (Propriety) --- 礼儀正しさや、思慮深い行動が評価される程度。
- E 意識性 (Awareness) --- 自己の探究、政治的関心、創造的・芸術的関心が強調される程度。

上記、領域Dの元の用語“Propriety”は内藤(1981)によって“妥当性”と訳されていたが、統計的概念と紛らわしいために本研究では“礼儀性”と改称した。

さて、我が国においては、平木典子が Pace の C U E S を基に 100 項目よりなる日本語版 C U E S を作成し、立教大学において 1972 年から 1980 年に至るまで 7 回にわたり継続的に実施してきた(内藤, 1981)。その他にも、この日本語版 C U E S を用いた研究は、関西学院大学と北星学園大学(土橋, 1979)でも行われている。またこれとは別に、I C U においても同じ Pace の C U E S を基に 4 段階評定尺度を備えた Japanese University Educational Environmental Scale (JUEES) が作成され、1976 年 9 月、在学生 1,335 名による I C U の教育環境に対する評価の測定が行われた(原・牧野・松村・村山・島田, 1980)。この J U E E S では日本の諸大学の教育環境を比較評価するため、次の様な手続きの下で質問紙が作成された。まず、C U E S に含まれる全質問項目を日本語に翻訳し、次にアメリカと日本の大学における

文化的差異を勘案して意味が不明確ないしは回答が困難であろうと予想される項目を削除し、その結果5領域、各15項目、計75項目を選び出したものである。なお、回答の形式に評定尺度を用いた点が、原版および日本語改訂版と大きく相違する点である。

1983年には、ICUでも他大学との比較を容易にするためCUESを用いて教育環境調査を行い、他大学（北星学園大学、立教大学、関西学院大学）との比較を試みた（植田・石塚・原，1984）。当時1,800人の在校生の中から無作為に選んだ829人に質問紙を配布し、305名から回答を得た。その結果、として以下の4点が挙げられた。

- (1) ICUにおいては“礼儀性”が最も高く評価され、次いで“意識性”、“学究性”と続き、“共同性”と“実用性”は比較的低く評価された。
- (2) ICUで得られた“学究性”と“意識性”の得点は他の大学よりも非常に高かった。
- (3) ICUの学生の評価は、立教大学または関西学院大学の評価とは僅かに異なるが、北星学園大学の学生の評価と類似していた。
- (4) ICUの学生のみが、教育環境の評価において、ミネソタ大学の学生と共通したものが見られた。

1976年と1983年の調査から共通に浮び上がるICUの特徴は“礼儀性”、次いで“学究性”と“意識性”が高く、“共同性”と“実用性”が低いことであり、これらは“基督教主義の大学としての宗教的雰囲気を保ちつつ個の確立を目指す”と云うICUの学風が70年代後半から80年代前半にかけて維持されていることを示しているように思われる。

しかし、最年10年間の日本においては非常に急激な社会変動がみられ、大学がその影響からひとり独立であるとは考えられない。従って80年代から90年代にかけて大学の教育環境にもかなりの変化が見られると思われる。本研究の目的はCUESによって、学生の意識上に表れた心理的環境としてイメージされる大学像を調査することを通して、ICUの10年前（1983年）と現在（1993年）に至るまでの時代的変遷を検討することである。このこ

とは、本学の在り方を見直すための一資料として、本学における自己評価活動の一端に貢献するものと思われる。

## 仮説

- 1) I C U の 1983 年度と 1993 年度の項目毎の肯定的反応の比率には変化が見られる。
- 2) I C U の 1983 年度と 1993 年度の各カテゴリー得点には変化が見られる。
- 3) I C U と他大学の教育環境の各カテゴリー得点には差異が見られる。

## 方 法

**被験者** 1983 年度 I C U 在学生 305 名の資料（植田他，1984）を借用した。1993 年度 I C U 在学生 557 名の資料を用いた。また、参考資料として 1970 年代後半の立教大学、関西学院大学、北星学園大学の資料、と 1993 年度の K 私立大学（経済学部）、C 女子短期大学の資料をも用いた。

**調査用紙** 1983 年度は“大学環境調査”（Pace [1967]）の日本語版として、“C U E S”〔内藤，1981〕の 100 項目を用いた。回答方法には“はい”・“いいえ”の 2 肢選択法を用いた。

1993 年度は、上記の調査項目から現代の日本の大学に不適切なものを削除し、100 項目を 75 項目に減らし、“全然あてはまらない”、“あまりあてはまらない”、“ややあてはまる”、“とてもあてはまる”の 4 肢選択法を用いた。

**手続き** 学生個人別連絡用ボックスを通して調査への協力を依頼し、回収箱を設けて回収を行なった。1983 年度の場合、“はい”に 1 点、“いいえ”に 0 点を与えた（叙述が否定的な場合には逆である）。1993 年度の場合、“全然あてはまらない”、“あまりあてはまらない”に 0 点、“ややあてはまる”、“とてもあてはまる”に 1 点を与え 1983 年度と比較できるように換算した。更に、領域別に 15 点満点で被験者それぞれの得点を算出し、その後全被験者の領域別平均得点および標準偏差を求めた。

## 結 果

各項目に対する肯定回答、否定的回答の百分率を求め、1983年度と1993年度において、 $\chi^2$ 検定を行なった(表1)。

表1 ICUにおける1983年度と1993年度の教育環境の比較(項目)

質 問 項 目	肯定的反応の比率(%)		
	1983	1993	有意水準
A “実用性 (Practicality)”			
1 学内の出来事については、すぐ知ることができる。	36.4	53.1	***
2 学内は、標識や方向案内図等によってわかり易くなっている。	43.9	29.5	***
3 学内は、この大学独特の雰囲気が高い。	95.4	95.3	N.S.
4 この大学は、より実用的・現実的教育をする傾向がある。	27.1	36.0	**
5 成績優秀な学生には、特別に奨学奨励の機会が与えられる。	66.7	50.2	***
6 学生は、リーダーシップ養成の機会に恵まれている。	29.6	37.7	*
7 この大学は、学生が不満を申し立て易いようになっている。	18.1	40.8	***
8 学内環境は、大学にふさわしく美しく便利に整っている。	79.1	72.9	*
9 大学は、学生の能力や個性を生かす機会を与えている。	61.1	69.6	*
10 コンパやダンスパーティ等の社交の機会が沢山ある。	42.8	24.2	***
11 新しい流行や流行語がたえず学生の間ではやっている。	34.8	25.1	**
12 多くの学生は自分の尊敬する人物のようになろうとする。	25.6	36.7	**
13 学生に対して、病気予防のために、保健指導が徹底している。	35.9	10.5	***
14 キャンパスでは、多くの有名人が招かれ講演会・音楽会・学生討論会が開かれている。	65.5	20.9	***
15 この大学には、特別な資料や立派な設備がある。	76.9	30.0	***
B “学究性 (Scholarship)”			
△ 1 学生の勉強意欲をかり立てるような教授方法を工夫し実行している教授は少ない。	38.6	59.3	***
△ 2 一生懸命に勉強しなくてもたいていの科目は簡単にパスできる。	67.6	64.1	N.S.
△ 3 学生は、授業中さされるまではすすんで発言しない。	46.5	59.6	***
4 教授は学生の能力を十分引き出している。	14.0	32.8	***
5 学生の間では、真剣な知的レベルの高い討論がよく行われている。	31.1	54.7	***
△ 6 学問のきびしさを教える教師は少ない。	32.5	52.3	***
7 多くの教授は、積極的に研究にたずさわっている。	73.8	81.5	*
8 教師の研究室をたずねて、議論をしたり、質問したりする学生が多い。	44.3	55.6	**
9 ほとんどの科目では、持続的な勉強や予習が必要である。	66.0	62.6	N.S.
10 知的レベルの高い授業が多い。	57.4	71.9	***
11 学生は勤勉であり、確固たる勉強目標をもっている。	50.0	70.6	***

12 この大学は、純粋な学問や基礎研究の面ですぐれている。	63.5	59.1	N.S.
△13 この大学では、入学すれば卒業は簡単である。	79.3	74.5	N.S.
14 ほとんどの学生は、授業でノートをきちんととろうとする。	74.9	75.9	N.S.
15 多くの学生は、自分の専攻を決めるにあたって、はっきりした目的を持っている。	47.4	59.0	**

C “共同性 (Community)”	1983	1993	有意水準
△ 1 学内では、うわべだけの表面的なつきあいが多い。	46.6	53.5	N.S.
2 学生は、困った時はお互いに助け合う。	87.5	70.4	***
3 多くの人は、自分の周囲の人に対して思いやりがある。	78.0	73.0	N.S.
4 多くの上級生は、新入生が学園生活にとけこめるよう積極的に手助けをしている。	39.3	40.8	N.S.
5 この学校は、非常に親しみやすいという評判である。	26.0	34.5	*
6 大学の行事に、多くの学生は積極的に協力する。	13.5	17.7	N.S.
7 学生主催の行事や講演は、みんなの話題になる。	30.8	30.4	N.S.
8 学内では、仲間意識が高い。	62.8	56.7	N.S.
△ 9 ほとんどの教授は学生の個人的な問題に興味がない。	46.7	49.3	N.S.
10 お互いによく知り合えるような機会が多くある。	46.3	40.5	N.S.
11 教職員に対して、学生は親近感を持っている。	62.1	77.0	***
12 多くの学生は、卒業してからでも何らかの形で、大学とつながりを持ちたいと思っている。	63.5	65.5	N.S.
13 クラブ活動は、大学にとって必要不可欠なものである。	77.0	64.6	***
14 この大学の社会的評判はとても気になる。	62.8	63.4	N.S.
15 この大学の個性を誰もが感じている。	91.0	87.2	N.S.

D “礼儀性 (Propriety)”	1983	1993	有意水準
1 学生団体は、社会のルールは勿論、大学の規則に従って活動している。	82.8	59.0	***
2 学生が泥酔したり、乱暴したりするようなことはめったにない。	81.1	59.5	***
3 学生は、大学の所有物を良心的に扱う。	72.4	62.9	**
4 学生の出版物が個人攻撃をしたり、特定の団体の名誉を傷つけるようなことはしない。	80.4	71.4	**
5 この大学では、目上の人に尊敬を払うべきだと思っている人が多い。	22.6	20.3	N.S.
△ 6 学生は、音楽会や講演会で騒いだり身を入れて聞かないことがある。	81.9	74.4	*
7 学生は、団体生活において、自分の健康管理を行っている。	70.4	54.3	***
8 学生は、団体として行動する場合は、大学に届けている。	67.6	51.2	***
△ 9 学生は、自由奔放な態度で教授を戸惑わせている。	87.5	75.6	***
△10 学生は、時々とびげな行動をしたり反抗したりする。	78.9	61.3	***
△11 学生は、規則などあまり気にかけていない。	44.0	20.7	***
12 学内で、学生のはめをはずした行動は考えられない。	55.4	32.1	***
13 授業の途中で出入りする学生は少ない。	37.4	37.7	N.S.
△14 学内の多くの人は、他人への思いやりが少ない。	78.3	74.0	N.S.
△15 時間どおりに授業をはじめる教師は少ない。	76.4	76.8	N.S.

E “意識性 (Awareness)”	1983	1993	有意水準
△ 1 学内ですぐれた科学者が来て講演しても聴衆は少ないだろう。	76.2	68.4	*
2 大部分の学生は異なった考え方や事柄をかなり冷静に客観的に判断している。	76.0	74.4	N.S.
△ 3 ここでは、自己の視野を広げるような機会はめったにない。	81.4	82.2	N.S.
4 学生の演劇、音楽、絵画などにたいする関心は高い。	80.5	74.3	*
△ 5 学内で、すぐれた評論家が来て講演しても聴衆は少ないだろう。	83.1	77.5	N.S.
6 学生は、国内外の情勢に大に関心を持っている。	61.1	81.9	***
7 進歩的文化人の発言には、かなり関心がある。	73.6	71.9	N.S.
8 現代の社会的・政治的生活において、ほとんどの学生が自己の とるべき役割について強い意識と責任を感じている。	22.1	36.0	***
9 学内においては、お互いの道徳感・価値観の違いを認め合おう としている。	78.6	77.9	N.S.
10 学生は、自分の個性に気がついている。	69.4	78.8	**
△ 11 学内に哲学者や神学者がきて講演しても、聴衆は少ないだろう。	54.8	59.1	N.S.
12 学生の世界平和に対する関心は高い。	66.0	80.5	***
13 この大学で、はばの広い考え方を持っている教師が多い。	66.2	69.4	N.S.
14 授業内容と関係なく、すすんでクラス討論させる教師が多い。	27.8	47.8	***
15 休暇を利用して見聞を広めようとする学生が多い。	83.4	90.0	**

(有意水準  $p < .05 = *$ ;  $p < .01 = **$ ;  $p < .001 = ***$ )

(項目番号右の △ は逆転項目を示す。なお、逆転項目における肯定的反応の比率は 1983 年度の場合 “いいえ” と答えた比率、1993 年度の場合 “全然あてはまらない”, “あまりあてはまらない” に答えた比率である)

各項目における得点を各カテゴリー毎に加算しカテゴリー得点を算出し、1983 年と 1993 年のそれぞれの被験者群の平均カテゴリー得点を図 1 に示した。さらに、2 つの時代において、等分散仮説を検定したところ、いずれのカテゴリー得点においても有意な差が見られなかったため、 $t$  検定によって平均値の差の検定を行なった。その結果、1983 年度から 1993 年度にかけて有意に増加したのは、“学究性”と“意識性”( $t=5.53$ ,  $df=776$ ,  $p<.001$ ;  $t=3.14$ ,  $df=794$ ,  $p<.01$ )であり、逆に有意に減少したのは“実用性”と“礼儀性”( $t=5.64$ ,  $df=789$ ,  $p<.001$ ;  $t=8.96$ ,  $df=780$ ,  $p<.001$ )であった。なお、“共同性”においては有意な変化は見られなかった。

また、1983 年度における ICU、北星学園大学、立教大学、関西学院大学の資料の比較、1993 年度における ICU、K 私立大学、C 女子短期大学の資料の比較をそれぞれ図 2、図 3 に示した。



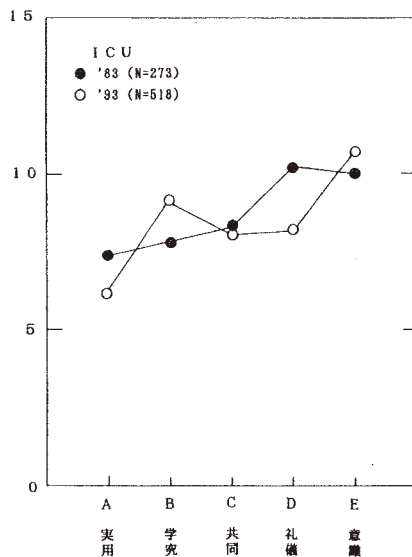


図1 1983年と1993年におけるICUの教育環境

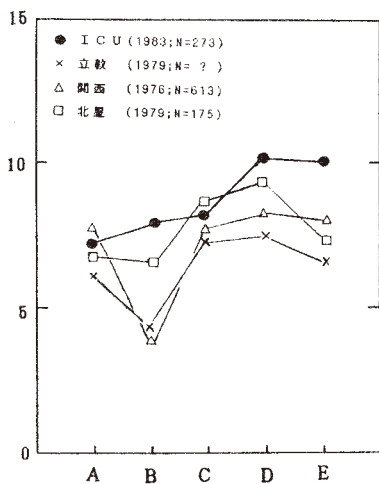


図2 1970年代後半から1980年代前半にかけての諸大学の教育環境

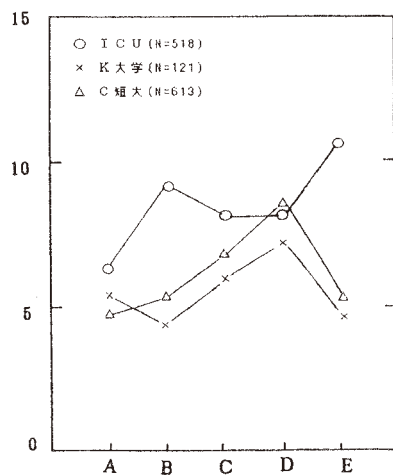


図3 1993年度の諸大学の教育環境

## 考 察

### 1983 年度と 1993 年度における I C U の教育環境の比較

各領域ごとに 1983 年度から 1993 年度における本学の教育環境の変化について検討してみたい。表 1 より、各領域の項目毎において (1) 0.1 % の有意水準で肯定的反応が増加（あるいは減少）した項目の内容から時代的変遷の特徴を見出し、次に (2) 上記以外で 80 % 以上（あるいは 20 % 以下）の反応率を示した項目の内容から I C U の特徴を検討した。最後に、図 1 から見られるカテゴリー得点の時代的变化を各項目の変化と併せて検討した。

**A. 実用性 (Practicality)** 個々の項目に対する被験者の反応から、I C U の独特な雰囲気というものは維持されつつ (A3) も、1983 年から 1993 年にかけて、学内情報の伝わりやすさ (A1)、学生の意見の云いやすさ (A7) は高くなっているが、その反面、大学側の学生に対するハード (案内図 [A2]、学内の資料・設備 [A15])、ソフトの両面でのサービス (奨学金 [A5]、保健指導 [A13]、講演会 [A14]、社交の機会 [A10]) が低くなっていることが見出される。

カテゴリー得点において 1983 年から 1993 年にかけて“実用性”が減少したことから、“個人的地位や実利などが強調される程度”が現代の I C U において低くなっていることが見出される。また、“実用性”は 1983 年度も 1993 年度も I C U の中では一番低い領域であり、“実用性”を身につけることを直接の目標としていない、教養学部体制の表れとも考えられる。

1983 年度から 1993 年度にかけての“実用性”の低下は、大学側が時代の急激な変化に追いつけず勉学以外の日常的な学内サービスについての対応が時代遅れとなっていることを反映していると思われる。

**B. 学究性 (Scholarship)** 各項目に対する被験者の反応から 1983 年度から 1993 年度にかけて、教師・学生の両者における学問的意欲・知的関心に対する積極的な関与が更に増加していた (B1, B3, B4, B5, B6, B10, B11)。また、教授の研究熱心さが学生によって強く認識されていることも特徴的で

ある（B7）。

“学究性”のカテゴリー得点の上昇からも、1983年度から1993年度までに“学問的意欲、知的関心などが強調される程度”の増加が示唆されるだろう。これは学問の府としての大学として望ましいことと言えるだろう。

**C. 共同性（Community）** “共同性”に関しては、ICUの個性は時代にかかわらず誰もが強く感じており（C15）、教職員に対する親近感はやや増加しているが（C11）、大学の行事に対する学生の関心は非常に低く（C6）、学生同士の関係はやや薄くなってきている（C2, C13）と思われる。全体的には、1983年度から1993年度まで変化した項目が少なかった。

カテゴリー得点に有意な差が認められなかったことから全体として“共同体としての意識や実体が存在する程度”に際立った変化は見られなかったと考えられる。

**D. 礼儀性（Propriety）** “礼儀性”は殆どの項目において肯定的反応が減少している（D1, D2, D7, D8, D9, D10, D11, D12）。これは1983年度から1993年度までの時代的变化の大きな特徴であり、学生の規則や礼儀を重視する態度は激減していると云っても良いと思われる。カテゴリー得点の変化からも“礼儀正しさや思慮深い行動が評価される程度”の減少が認められる。

また、このカテゴリーは1983年度において5カテゴリーの中で、1位と非常に高く評価されていたが、1993年度においては3位に落ちている。

このように、“礼儀性”が低くなったことは、“大学と云う共同体に所属している感覚”、すなわち“大学に対する帰属意識”が希薄化してきた影響ではないと思われる。そして、そのため大学での規律や礼儀を軽視する風潮が増長しているのではないだろうか。

**E. 意識性（Awareness）** “意識性”は項目において増加するものが多く、特に国際社会、世界平和に対する意識が増加してきている（E6, E8, E12, E14）。また、自らの視野を広めようとする雰囲気は1983年と1993年ともに強く存在している（E3, E4, E5, E15）。

カテゴリー得点においても“意識性”はやや増加しており、また5つのカテゴリーの中で1983年度は2位だったのが1993年度は1位になり、“自己の探求、政治的関心、創造的・芸術的関心が強調される程度”が非常に高いことが、現代のICUの特徴と言えるだろう。

## 他大学との比較

1983年度のICUは他大学と比べて、“礼儀性”、“意識性”が高く、“学究性”も高かった(図2)。このパターンは北星学園と一番類似していた。“礼儀性”はICUにおいて各カテゴリーの中で一番高く、これがICUの特徴を示す領域と考えられた。

しかし、1993年度においては、“意識性”と“学究性”は他大学を大きく引き離し、ICUの特徴と云うことができるが、“礼儀性”においては、K大学、C女子短期大学とほぼ等しい(図3)。図2と図3を比較すると、1983年度においても、また調査項目において多少異なるがICUにおける1976年度の調査(原他,1980)においても、5領域の中で一番高い得点を示していた“礼儀性”が1993年度において5領域の中で3位と落込んでしまっている。

総合的に見ると、“学究性”と“意識性”の増加、“礼儀性”と“実用性”の減少が、1983年度から1993年度に至る時代的变化の特徴である。

先ず、ポジティブな特徴として、“学究性”と“意識性”の増加から、学生の知的関心が伸び伸びと育てられ、個としての自覚を高め得る環境としてICUが機能している様が浮き彫りにされた。このことは1983年度と1993年度の両時代において他大学と比較した際にもICUの特徴として際立っており、最近のリクルートの調査(リクルート,1992)において大学満足度調査でICUが第一位になった原因であろう。

また、ネガティブな特徴として、“実用性”の減少から、学内の資料や設備、そして学生に対する日常的サービス(福祉、講演会、社交)などという、

大学のソフト・ハード両面におけるサービスが時代遅れとなっていることをが伺われる。“礼儀性”の減少から、大学に対する帰属意識の低下からそこでの規則や礼儀を軽視する風潮が増大し、基督教主義の大学としての特徴がなくなってきたことが見出された。

## 結 論

I C Uの特徴として、1983年と1993年の両時代にわたって学生によって共通に認められたのは、“個としての自覚を高めつつ知的な興味・関心を伸び伸びと育ててゆける雰囲気”であったと言える。更に、それは1993年において増加する傾向が見られた。しかし、学内の資料や設備、勉学以外の日常的サービスに対して学生の評価は下がっており、大学としての対応の遅れが目立っている。また、学生が規則や礼儀を軽視する風潮が増加し、基督教主義の大学であるにも拘らず、道徳性や倫理性が低下してきていることが見出された。

つまり、I C Uにおいては、ここ10年間で“学問の府”としての特徴は維持されているが、“基督教主義”が風化してきている様に思われる。原因としては、一つには近年におけるI C Uの学生数の増加から、一人一人の学生の大学への帰属意識が低くなり、その結果大学の規則や礼儀などを軽視する雰囲気が増加してきたのではないかとと思われる。このことは、現代の大学生の人生観において見出された個人主義化（原・大井・岡林，1992）にも反映されていると考えられる。道徳観・倫理観などといったことを現代の大学に望むことはもはや不可能なのかもしれないが、この様な現状を踏まえ、大学の在り方について考えてゆくべきだろう。

## 文 献

- 土橋信男 1979 大学の教育的環境の継時的変化－1977年から1979年における北星学園大学の教育環境について－北星論集 17, 115－153.
- 原 一雄・牧野文恵・松村治子・村山興子・島田博美 1980 国際基督教大学における教育環境調査の試み 教育研究 国際基督教大学 23, 112－127.
- 原 一雄・大井直子・岡林秀樹 1992 ICUにおける大学生の価値観研究 アジア文化研究 別冊3 国際基督教大学, 91－100.
- Koffka, K. 1935 *Principles of gestalt psychology*, Harcourt, Brace
- Lewin, K. 1936 *Principles of typological psychology*, McGraw－Hill
- Murray, H. A. 1938 *Explorations in Personality*. New York: Oxford Univ. Press
- 内藤 武 1981 大学環境調査（キューズ）とは 大学時報, 84－92.
- Pace, C. R & Stern, G. G. 1958 An approach to measurement of psychological characteristics of college environments, *J. educ Psychol.* 49, 267－277.
- Pace, C. R. 1967 *College and University Environment Scale* (second edition), Princeton, N. J.: Educational Testing Service.
- リクルート 1992 在学生による「大学別満足度調査」 カレッジマネジメント 52, 4－38.
- 植田淳子・石塚正一・原 一雄 1984 ICUの教育的環境の調査研究－他大学との比較－ 教育研究 国際基督教大学 26, 65－83.

**Diachronic Changes of the Educational Environment of ICU:  
A Comparison between the Campus Atmospheres  
in 1983 and 1993  
(English Résumé)**

Hideki Okabayashi  
Naoko Ooi  
Kazuo Hara

The purpose of this study is to survey diachronic changes of the educational environment of ICU from 1983 to 1993. The undergraduates, 304 in 1983 and 557 in 1993, answered the questionnaires "CUES", which had 75 items in 5 categories; (a) *Practicality*, (b) *Scholarship*, (c) *Community*, (d) *Propriety*, and (e) *Awareness*. Each of item scores and category scores was compared between 1983 and 1993. Although *Awareness* and *Scholarship* had been predominant, *Practicality* and *Propriety* decreased through a decade. These results suggest that the facilities and service for students have fallen and the Christian atmosphere have attenuated.